

厳正な審査の結果、2027 年度の調査研究助成事業は、以下の 8 件について採択することと決定しました。（並びは部門ごとの申請順・（3）教育普及促進助成は事務局による審査）

※助成金額はいずれも現時点の予定であり、実際の金額は変更になることがあります。

（1）研究部門

研究代表者（所属）	調査研究テーマ	助成金額
喜多 日菜 (談山神社 刀剣保存委員会)	談山神社所蔵刀剣群に関する調査資料の整備	200 万円

（2）奨励研究部門

研究代表者（所属）	調査研究テーマ	助成金額
杉本 良 (北上市立博物館)	月山貞一と大坂城 ー慶応年間に製作された 2 資料からー	49.4 万円
穴戸 俊悟 (公益財団法人 奥出雲多根自然博物館)	中国山地における農地開発を主目的とした 鉄穴流しの応用に関する考察 ー島根県奥出雲町を中心としてー	39 万円
戸塚 直史 (久能山東照宮博物館)	久能山東照宮における幕末の刀剣手入れについて	25 万円

（3）教育普及促進助成

研究代表者（所属）	プログラム名	助成金額
花島 絵美 (一般財団法人総合 科学研究機構)	日本刀の中をのぞいてみよう ー中性子で読み解く刀剣研究ー（仮）	30 万円
宮城島 由貴 (久能山東照宮博物館)	日本刀ができるまで（仮）	30 万円
山田元樹 (大牟田市立図書館)	かたなをつくる ー悠久の歴史を継承する秘伝の技ー	30 万円
福田 和浩 (八尾市立しおんじやま 古墳学習館)	心合寺山古墳出土「三葉環頭大刀」を活用した 教育普及プログラム開発プロジェクト ー展示資料を活かした教材開発と人材育成	30 万円

審査総評

審査委員長 原田一敏（東京藝術大学 名誉教授、ふくやま美術館 館長）

本年度の応募は、研究部門 3 件、奨励研究部門 5 件と昨年度より増えた。昨年度は美術史・歴史、考古学的な日本刀研究が中心であったが、今年度はさらに民俗学、刀剣の保存科学が加わり、それに対応するためその両部門の研究者が審査員として加わった。

研究部門では、昨年度助成した「談山神社所蔵刀剣群に関する調査資料の整備」が継続応募し、採択された。談山神社は多くの刀剣を所蔵しているが、それらをデータベース化して公表することを目的としていて、その成果は刀剣研究に寄与できるとの意見が出された。また研磨時に得た微量な鉄粉から放射性炭素測定を行うなどの科学的な研究手法も注目された。

奨励研究部門では「月山貞一と大坂城一慶應年間の製作された 2 資料から」は、大阪の月山と大坂加番を勤めた上山藩との関係、「長州之役坂城滞陣中令打之」銘の槍を基軸として、大坂月山を考察するものである。申請者はすでに月山貞吉や直胤などの研究論文を発表しており、その発展的研究として採択と評価をされた。

「中国山地における農地開発を主目的とした鉄穴流しの応用の関する考察」は、鉄穴流しが農地開発との応用されたことを明らかにする研究。これまでの本助成の刀剣研究とは異なる分野で、歴史学、民俗学的な要素があり、今回からならでは応募である。刀剣研究に関連する派生的研究の一つとして期待がされた。

「久能山東照宮における幕末の刀剣手入れについて」は、久能山東照宮に歴代将軍から奉納された刀剣が安政に研磨、白鞘の修復がされており、その経緯を『久能山御宮宝剣御拭一件』の文書から紐解く研究である。同文書の翻刻が主目的で、公刊も目指すという。目的が明瞭で研究体制が整い、実現性が高いと高評価された。

以上のように、テーマとしては東アジア全体を視野に入れた調査研究から一人の刀工の作刀背景の考察まで、さらには分野としては歴史学、保存の歴史まで多方面にわたり、内容も総体的に刀剣研究にとって有意義である応募であったことが認められる。しかし研究の遂行には人的、日数などを勘案すると、実現が難しそうなテーマが見受けられた。本機構は科学研究費に応募できない研究者に対しても広く研究助成を行うことを一つの指針としている。より具体性のある研究、何をどこまで究めるかを明確に示す事が重要である。

また助成金の使途が不明確な事例が複数あった。現地調査で何のために、何を見て、どのようにして行うのか、記載して欲しい。海外事例の研究については、調査の実現可能性を具体的に示してほしい。今回助成を得られなかった応募者も目的をより明確に絞って再度応募することと、新規の応募者も研究目標を明瞭に、そして実現性のある内容でトライしていただくことを希望する。